

53【街の散策からの気づき発見】

鷲宮神社・春季祭と鷲宮催馬楽神楽

会員 K.T.

4月10日、鷲宮神社(久喜市)春季祭で奉納される鷲宮催馬楽神楽を見に来ている。午前中は雨で午後に着いた時には雨は上がっていた。春季祭とは、春の農耕の始まりにあたり、五穀豊穡と国家安泰、人々の健康を願う伝統行事で、ここでは鷲宮催馬楽神楽が奉納される。この神社の歴史は、誠に古い。HPには、「当神社は出雲族の草創に係る関東最古といわれる大社である。神代の昔に、天穂日宮とその御子武夷鳥宮とが、昌彦・昌武父子外二十七人の部族等を率いて神崎神社(大己貴命)を建てて奉祀した。この別宮が現在の本殿である。(後略)」とある。参道の看板には、「当社は、天穂日命、武夷鳥命、大己貴命を御祭神としています。当社の境内地は、縄文時代や古墳時代の住居の跡が見つかることから、古くから開かれた場所であったことがわかります。当社が記されている最も古い歴史書として鎌倉時代の『吾妻鏡』があり、その記述から、源頼朝や執権北条氏からの尊崇を得ていたことが知られています。その後、室町時代になると下野国守護の小山氏や古河公方足利市、小田原北条氏などの保護を受け、徳川家康からも四百石の領地を与えられました。(後略)」と、この神社の古い歴史が記されている。

鷲宮神社は拝殿と神楽殿が向き合って建っている。神楽は拝殿の奥に位置する本殿に向けて奉納される。ここでの神楽の特徴は「催馬楽」と呼ばれる平安時代(794~1185)に流行した歌が、神楽の演目ごとに歌われることである。神楽殿の拝殿に最も近い場所に幣束立てが置かれている。幣束は、神様に対して感謝と敬意を表す「貢物」としての意味がある。舞人は舞台に出ると、この神前に向って礼をする。それは、本殿の神を拝み、これから神楽を奉納します、ということの意味している。私事になるが、かつて、「鷲宮催馬楽神楽」を調査したことがあり、懐かしく思っている。

午後の演目は、「端神楽」から始まった。「端神楽」は、神楽の曲目の前に、素面の巫女1人が白幣と鈴をもって舞う、番外と呼ばれる演目である。子供の巫女が習い覚えた神楽の舞を神様に奉納するほほえましい演目だった。次の神楽は、第五座「磐戸照開諸神大喜之段(いわと しょうかい しょじん だいき のまい)」、この演目は、巫女二人と翁の3人による舞で、天岩戸神話を題材にしている。神話のあらすじは、こうだ。「太陽神・天照大御神が弟神のスサノオの乱暴に怒り、天岩戸に隠れ、扉を閉ざした。太陽神が隠れたことで世の中が暗闇になり、困った八百万の神々が対策を相談し、岩戸の前で賑やかな宴会を開く、何かと気になったアマテラスが扉を少し開いたとき、天手力男命が岩戸を引き開け、アマテラスを外に引き出したことで、世の中が再び光を取り戻した。」という神話である。神楽の途中に「催馬楽」の歌が入る。「千早やぶる 神の御室に ひきしめの 万代にかけて 祝う榊葉」と、神聖な場所の神様が永遠に栄えることを願う祝いの歌を捧げる。続いて、第八座「祓除清淨杓太麻之段(ばつじょ しょうじょう しゃく おおぬさのまい)」が奉納される。この神楽も神話を題材とした舞だ。「イザナギが黄泉の国の穢れを落とすため、みそぎの水浴を行った。投げ捨てた物から12柱の神、水面で身を清める際、14柱の神、左目を洗うと、アマテラス、右目を洗うと、ツクヨミ、鼻を洗うと、スサノオの神々が誕生した。イザナギは三貴子の誕生を慶び、アマテラスに高天原、ツクヨミに夜の国、スサノオに海原の統治を任せた。」といわれる神話の禊である。ここでは巫女が2人で舞っていた。「催馬楽」の歌は、「大原や せがいやせがいの 水を手に汲みて 鳥は鳴くとも 遊びてゆかん さえ」と詠う。古い郷土芸能を継承してきた古典の世界がある。『すごいことだ』、と思う。



鳥居



神楽殿と幣束



参道



端神楽



鷲宮神社と指定文化財看板



鷲宮催馬楽神楽第五座



本殿裏/境内



鷲宮催馬楽神楽第八座